

臨床検査精度管理において人工知能は有用なツールになりうるか

第1回 Young International BLS Forum に向けた取り組み

◎原 祐樹¹⁾、菊地 良介²⁾、井上 直輝³⁾、藤井 絢子⁴⁾、弘津 真由子²⁾、高木 文也⁵⁾、竹浦 久司⁶⁾
名古屋第二赤十字病院¹⁾、国立大学法人 名古屋大学医学部附属病院²⁾、医療法人新青会 川口工業総合病院³⁾、埼玉県立がんセンター⁴⁾、山口大学医学部附属病院⁵⁾、社会医療法人 きつこう会 多根総合病院⁶⁾

【背景および目的】

国際化に対応するためには何が必要かを考えられる若手技師育成を目的とし、若手技師国際化対応力向上ワーキンググループ（若手WG）が2018年に発足した。若手WGによる初の企画とある International Young Biomedical Laboratory Scientist Forum (International Young BLS Forum) が山口県下関市で開催された第68回日本医学検査学会において実施されたのでその内容について報告する。

【方法】

本フォーラムでは精度管理における人工知能 (Artificial Intelligence : AI) の有用性、進化するゲノム医療及び遠隔医療の未来像の3つのテーマについて議論が行われた。我々は、精度管理とAIの有用性について日本、韓国および台湾の3か国からの参加者と議論を交わした。

【結果および考察】

議論の結果、抽出された精度管理に関する課題をいくつか列挙する。「精度管理におけるトレンドやシフトの解釈の仕方」、「外部精度管理に参加していない施設が少なくない」、「技師間差に起因するバラツキ」のように各国に共通する課題もある一方、「生理検査の精度管理が標準化されていない」、「生理検査は臨床検査技師ではなく看護師がしばしば実施している」など各国独自の課題があることが分かった。抽出された課題についてAIが解決策となりうるかについてさらなる議論を行った。我々が挙げた課題のほとんどはAIの導入により解決されるとの結論に至った。

一方、技師の教育やAIによって検知されたリスクに対するアクションといった部分はAIによる置き換えは現時点では難しいと考えられた。

【結論】

AIが得意とする分野に関してはAIを活用するとともに、まだAIには難しい部分を我々が担うことでAIへのタスクシフティングと共存を進めていくということであった。すなわち、AIに依存することとしないことをどのように定義していくかが大きな課題であると思われる。本フォーラムを通じた国際化への取り組みは、我々臨床検査技師の国際化対応力向上に向けた非常に良い内容であり、将来展望を見据えた際にとっても期待が持てる内容であったと考えられた。

連絡先：原祐樹 — 052-832-1121(内線 30815)